

上野動物区

—動物園と都市のバッファとしての保護研究拠点—



着想 | 00 都市の動物園と街を繋ぐ

都市における人間と動物との関係の再構築

動物は、私たちの生活空間の外側にいる存在ではない。残されたわずかな緑を手がかりに、都市の中にも生態系が確かに存在している。生き物を意識しながら都市を見渡すと、そこには都市の生態系において極めて重要でありながら、都市住民に認識されない生き物たちが都市の隙間に生きている。現代の都市動物園には、そうした生き物たちの存在を認識させると同時に、都市における人間の動物に対する態度を再編していくための場が必要ではないか。

本計画では、未知の世界に出会い、非日常世界を体験する場として広く愛される上野の地に、都市の動物とのさまざまな関わり方を探求する場を提案し、都市生活者の暮らしや都市空間を再構築する端緒となる場を、設計する。

上野動物園と街を繋ぐバッファとしての保護研究施設と都市の再編

塀で閉じられ、近隣地域と明確に隔てられた上野動物園にて、森の回復と保護研究拠点の設置、および開放を行うことで、これまで「上野動物園の裏側」と捉えられていた谷根端を、生物の生息拠点として捉え直し、建材や舗装材、緑地の形成手法などを様々に実験するモデル地域へと再編する。

建築は保護研究のみならず、研究者や活動家、地域住民、学生にも利用され、動物に関する多様な活動が展開される。さらに、来園者はこれまで通りに動物園を楽しみながらこの建築に到達し、これまで目を向ける機会がなかった都市の動物を発見し、さらにそれらの動物に真剣に向き合う人々の姿に触発される。地域での実験的活動が、来園者を通じて東京の都市全体へ広がる可能性を秘めている。

敷地 03 動物園を街に開くバッファの提案

武蔵野台地の森

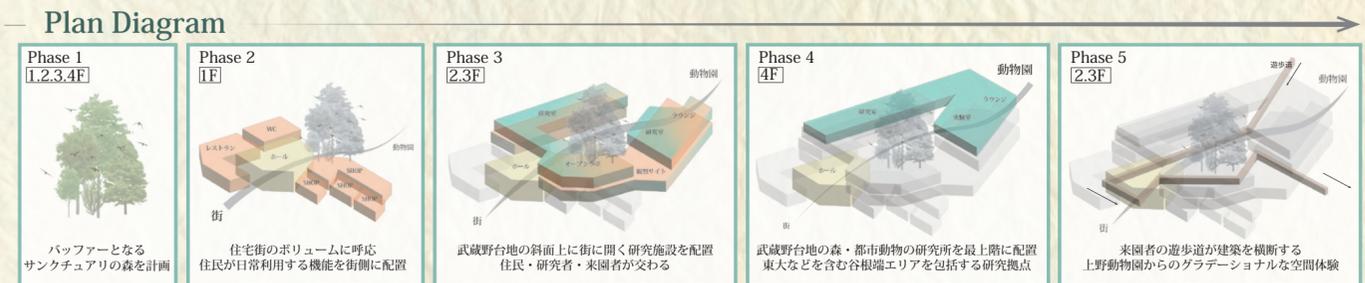
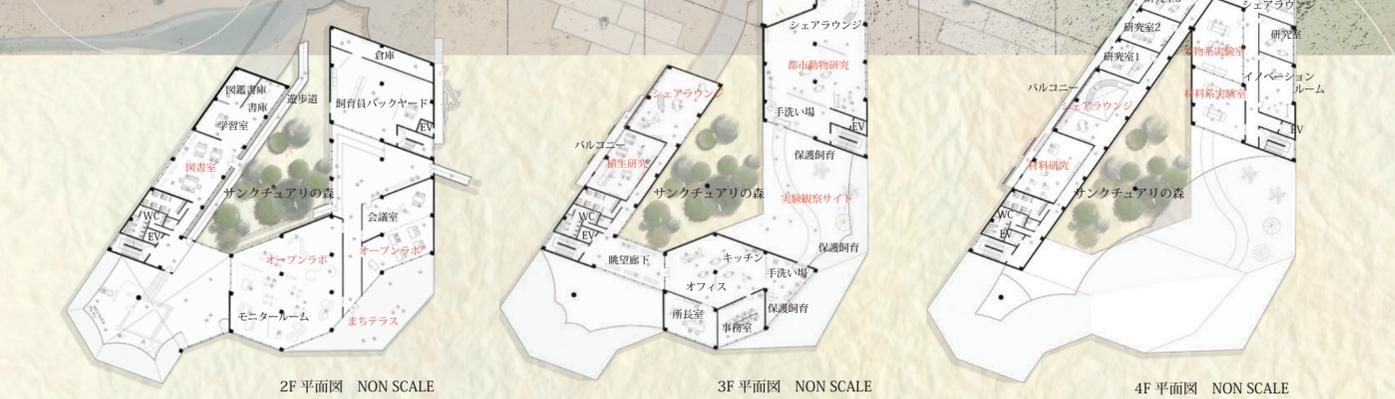
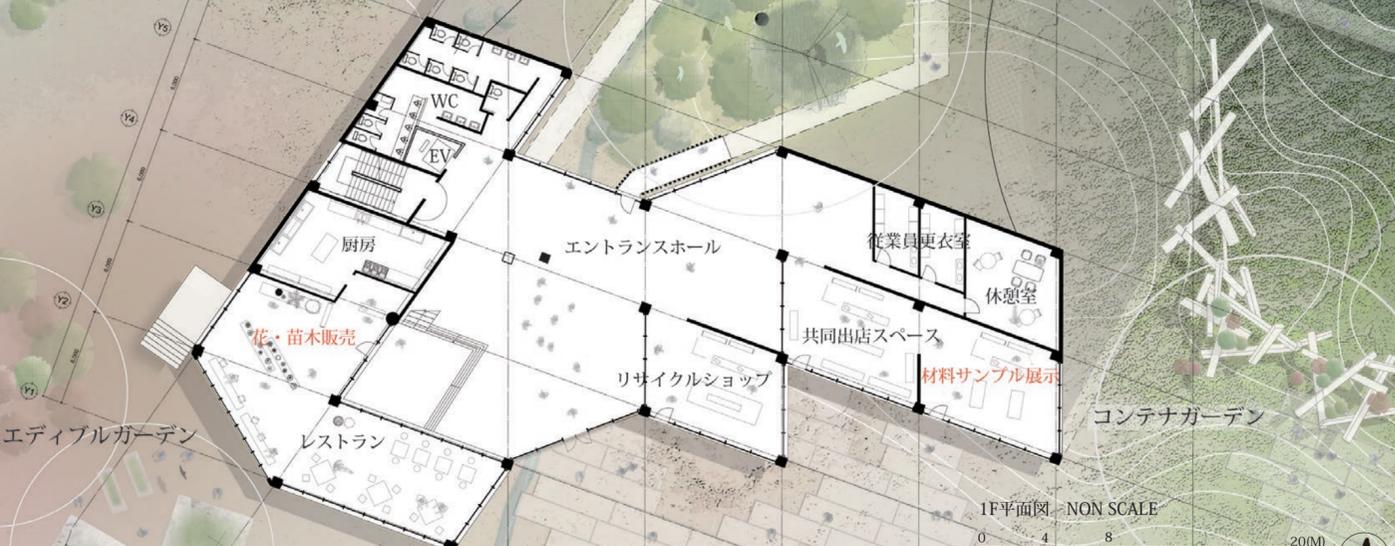
街には動物と都市の関係性の変化の起点を、研究者にはエリアを包括する研究拠点を、来館者にはグラデュエショナルな空間体験を提供するランドスケープデザイン

上野公園として整備される過程で失われかけている武蔵野の植生を計画的に回復させる。

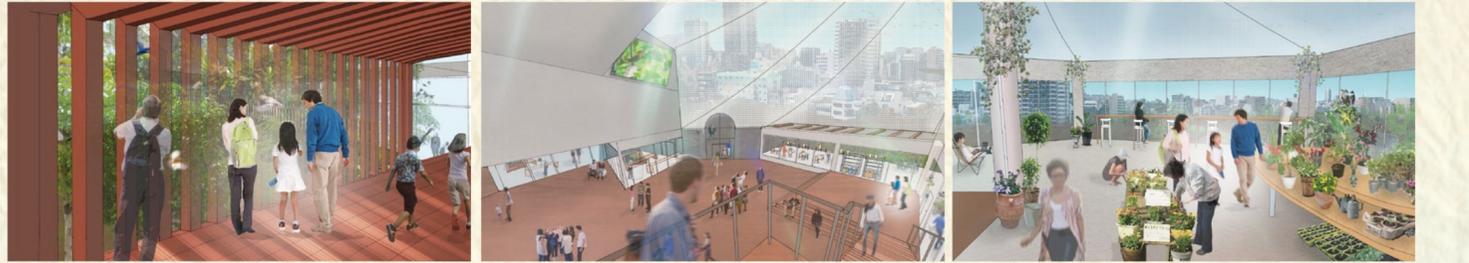
レッドリストの鳥類が息できる環境を人工的に計画。保護・観察を行う。サンクチュアリの森

余白のない都市空間における庭の代替として、鉢植えを共同所有する。繋ぐそれらは、生き物たちの生息拠点を繋ぐ。

人間にとっても動物にとっても食料となる植物を植え、都市における食料生産について学ぶ。



まず出会うのは、動物園で親しまれる動物 そして、都市動物の生息拠点へ 遊歩道は建築の中へ続いていく



最初に出会うのは、サンクチュアリの動物たち ホールはショップやカフェ、広場と接続され、住民や研究者の活動に触れ、谷根端では日常となった生活に入り込む



再び遊歩道をあがると 研究者や住民も行き交う2階の踊り場に オープンラボで研究者や住民とともに都市における動物との関わり方を発見

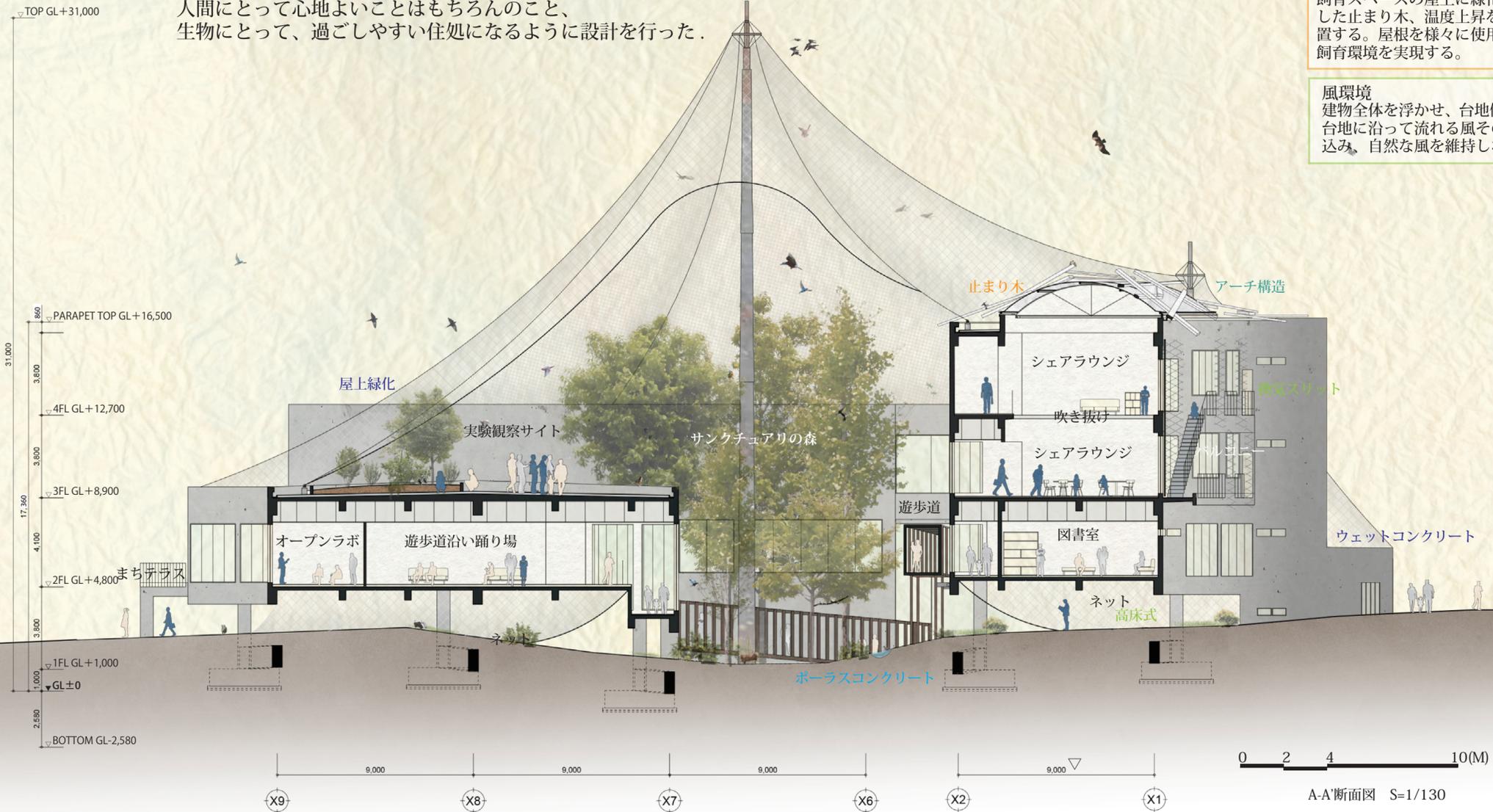


来館者は動物園からひと繋がりに巡り、街へ出ていく過程で、都市が生物たちに共有される世界を思い描けるようになる

森から建築へ、台地を下る。遊歩道が建築内部へつながり、森を抜けた来館者たちは動物・研究者・地域住民と出会う。

計画 04 都市で生きる建築・環境計画

都市は人間にも生物にも共有されている。
人間にとって心地よいことはもちろんのこと、
生物にとって、過ごしやすい住処になるように設計を行った。



屋根・壁の活用
飼育スペースの屋上に緑化スペース、屋根材を延長した止まり木、温度上昇を抑える KAEI パネルを設置する。屋根を様々な使用することで、変化のある飼育環境を実現する。

風環境
建物全体を浮かせ、台地側の低層階をなくすことで、台地に沿って流れる風そのまま飼育スペースに取り込み、自然な風を維持しながら、熱ごもりを防ぐ。

多様な素材の活用
緑化に限度のある都市における、環境・生物との共存のあり方を模索する。様々な素材や今ある森を活用し温度上昇、反射、蓄熱の軽減、動植物の住処の創出を試行する。

水環境
小川を造成し、生物は川から常に水にアクセスできる。保水性の高い素材の活用や雨水利用など、生命維持、環境改善に作用する水をふんだんに利用する。

01. 高床式



建築全体を浮かせることで、台地に沿み出してくる風を遮断せず、サンクチュアリの森、けんちくないぶまで、そのまま取り入れる。浮かせることで一面に土壌面が露出し、スラブ下は飼育生物の隠れ場になる。暗所を好む昆虫などの生息地、動物の通り道にもなる。

05. 森

空隙率が高く、保水性、蒸発量に優れたウェットコンクリート。大きな空隙に土壌を充填することで、昆虫、植物、小魚の生息地を創出するポーラスコンクリート。両者とも、構造的強度では従来のコンクリートに劣るが、屋上、舗装など使用場所を工夫することで多くの面積をまかなえる。

02. 鳥の壁

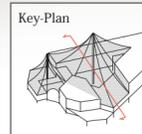
4階内側の壁を全面RC壁とし、保水性、蒸発散しやすく温度上昇を防止するウェットコンクリートや止まり木、レイアウト変更用のポールなどを設置する。

02. 止まり木

木材の張りだし。屋根から木材が張りだし、垂れ下がるような構造になっている。高い位置に止まり木を置くことで、人目につきにくい鳥の避難スペースとなる。

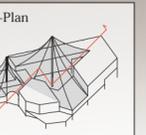
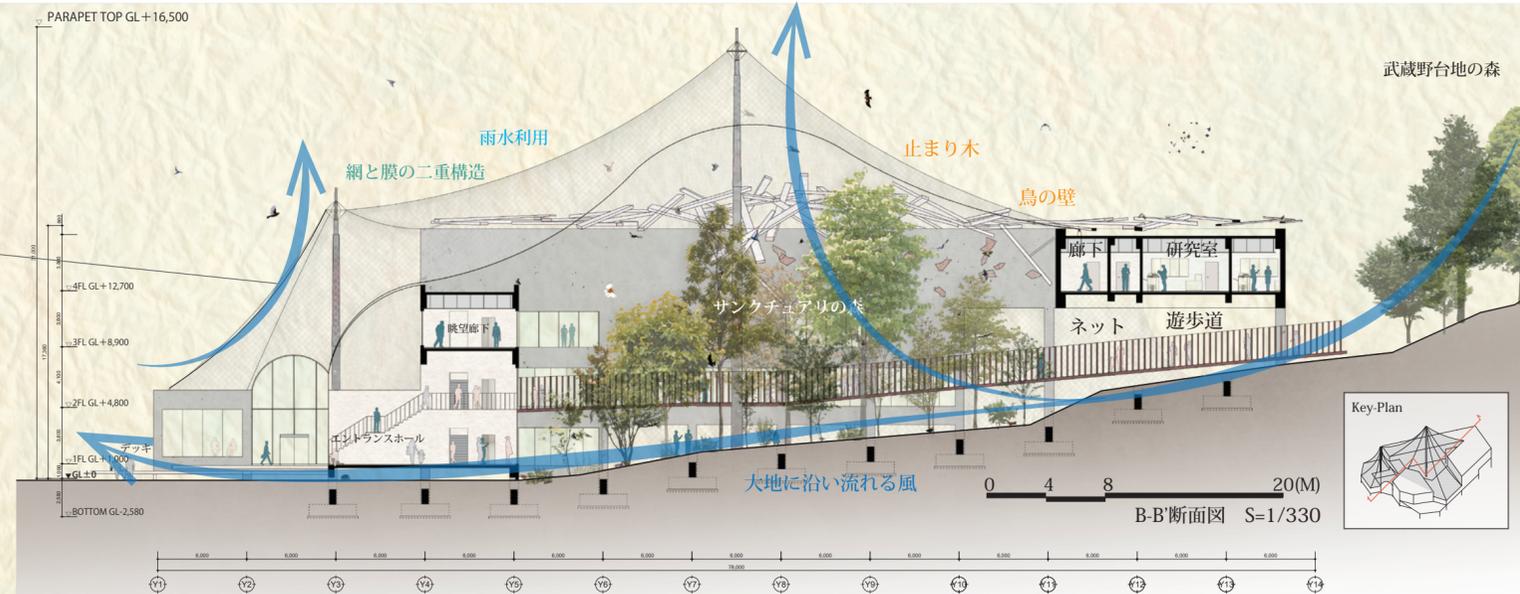
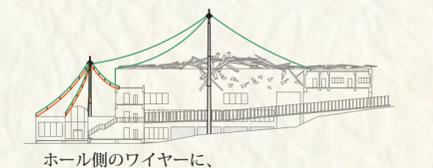
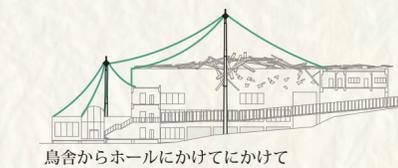
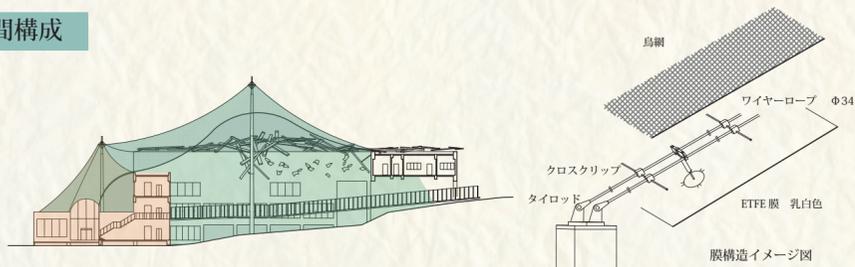
04. 様々なコンクリート

空隙率が高く、保水性、蒸発量に優れたウェットコンクリート。大きな空隙に土壌を充填することで、昆虫、植物、小魚の生息地を創出するポーラスコンクリート。両者とも、構造的強度では従来のコンクリートに劣るが、屋上、舗装など使用場所を工夫することで多くの面積をまかなえる。



膜・ネットによる生物と人間の空間構成

全体にワイヤーロープを吊り、鳥用ネットを張る。ホール側のみさらにワイヤーを吊り下げ、膜を張る。ネットが全体にかかることで一帯の空間を作りだし、膜を人間側に張ることで、両者の境界を穏やかにつけながら、室内空間を作り出す。



計画 | 05 谷根端エリアの市民活動拠点としての広場



1 エディブルガーデン

2 小さな生態系ビオトープ

3 新しい価値に出会うショップ

4 市民と専門家の協働ラボ

5 コンテナガーデン

5 生息拠点を繋ぐ小さなハビタット

都市においては、大規模緑地だけでなく、住宅地や密集市街地の小さな庭や植木が、生き物にとって生息しつづけるための重要な足掛かりになっている。しかし、都市空間は過密であるあまりに、ほとんどの土地は十分な庭のスペースを持たない。そこで、小さな単位の共有庭を設置し、小さなハビタットとなる鉢植えを街に配置する。



計画 | 06 モデル都市としての谷根端の円環上の更新

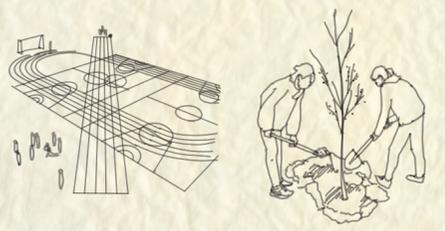
上野動物園をきっかけとして、谷根端エリアの都市空間を生物の生息拠点として、捉えなおす。円環上に並ぶいくつかのスポットは、谷根端の住民に日常的に利用されながらも、同時に生物の生息拠点となり得る場所を次なるステップとして選定した。

生物はわずかに残された緑地や、人間の干渉しない隙間などを利用して生きている。一方で人間の住む都市は、人工物に覆われこれからも飽和し続けるだろう。

都市は人間の住む空間として密度を持ちながらも、生物とも共有されていく。これから先、生物が排除されることなく生きて行くためには、うまく都市空間を使いながら、生活者が街に生物のための空間を開いていくことが重要である。

学校 舗装と高温化 植栽と生物

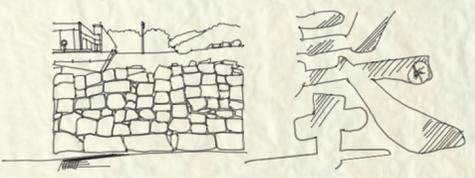
学校の校庭は、ゴム製チップが主流だが、夏場は熱をため込み温度上昇に繋がる。部分的に人工芝を敷いたり、苗木を育てるなどグラウンドの使い方を試す。また、生徒の育てるプランターや校庭の植栽も、立派な生物の食料である。



谷中霊園

墓地の石材は、昆虫の生息環境に大きな影響をもたらしている。墓石の文字の隙間やカロート内部など、暗く湿度のある空間は昆虫に好まれる空間である。

また墓地のような、適度に人間が入り出す空間は、生物にとっても居心地が良い。



人間のための空間と思われる場所にも、生物は上手く暮らしている。私たちがその存在に気づき、居場所を大切に、空間の共有の仕方を考え、試しながら、生活することで、両者の生活は維持されていくだろう。

